

本多静六通信

第24号

 発行
 本多静六博士会
 を顕彰する

本多静六ひ孫の会のこと

東京大学名誉教授 河内 十郎

私は、本多静六の長女植村輝子の長女河内幸子の次男ですが、兄と姉が他界しているので、現在では本多静六の最年長のひ孫ということになります。この度、柴崎会長から「本多静六博士関係のことを自由に書いて下さい」と原稿のご依頼を受けました。本多静六については母や叔父たちから話を聞いたことがあるだけで、先の戦争を挟んで伊豆にいた曾祖父に会う機会もなく、書く材料に困ったのですが、数年前に「本多静六ひ孫の会」を開いたことがあったので、そのことについて書かせて頂くことにしました。

ひ孫の会を開くまでのいきさつ

本多静六と私との関わりといえ

ば、唯一思い出されるのは、中学生の頃、「ひいお爺さんが病気のようだから、励ましの手紙を書きなさい」と母に言われ、「会ったこともない人に何で手紙を書きなぐちやいけないだ」と渋々書いたことがあるくらいです。それでも、日比谷公園の松本楼での教子の結婚式のスピーチでは、「窓から見える大きな銀杏は私の曾祖父本多静六が・・・」と話したり、東大の定年の年の最後の教授会での挨拶では、「曾祖父本多静六が植えた銀杏並木を歩きながら二十四年間を過ごせたのは大変幸せでした」と話すなど、母や叔父たちから聞きかじってきたことから本多静六の名を折に触れて思い出していました。それも遠い記憶

の中に残っていた臆おぼろな感じでした。そんな私であったため、教授会での発言を聞いた大学が、「駒場博物館で一高の展示を企画しており、本多静六先生も出てくるので、何か資料をお持ちでしたら提供して頂きたい」と言ってきたときも、あっさり「何もありません」と答えてしまいました。

こうした私と本多静六との関係が一挙に変化したのは、当時富良野の東京大学北海道演習林の林長を務めておられた梶幹男教授にお会いしたときからでした。

私が所属していた東京大学大学院総合文化研究科で、二〇〇七年の秋に梶先生が講演をなさり、その後のパーティーでお逢いしたときに、「本多静六のひ孫です」と名乗りました。このときも、初対面の梶先生との会話の切っ掛けになるかなと、富良野の演習林は本多静六が造ったという親から聞いて覚えていたことを口にしただけだったので、梶先生は途端に目を輝かせて、「本多先生は、明治政府が全く別の広い平坦な土地を提案してきたのを断って富良野を選んできたのを断って理想的な演習林ができたのです。是非

一度お出かけ下さい」と言われました。理想的というのは、起伏が多く標高に応じたさまざまな木が生えているという意味であることは後で知りました。

そこで翌年の七月に夫婦で出かけたところ、二万ヘクタール以上もある広大な演習林を、林長先生自らが三日間も車で案内して下さいましたが、それでも演習林のごく一部を見せて頂いただけのようでした。「お忙しい林長先生ではなく若い人で結構なのに」とお話ししたところ、「迷わず案内できるのは私ぐらいです」と言われ、またまた演習林の広大さにビックリしました。山あり、谷あり、湧き水ありの楽しい三日間で、標高百九十メートルの低地から千四百メートルの最高地まである地形の中で、高さによって木種が違ってくることも体験できました。途中で動物もよく見かけましたが、鹿は車に気が付くと直ぐに脇の藪に逃げ込むのに、狸と狐は車の前をいつまでも必死に走り、ついに力尽きたのかかなり経ってから藪に消えていきました。

演習林での三日間は、見る物全てが本多静六の偉大さを印象づけ

るものばかりでしたが、特に心に残ったのは、宿舎にあった明治・大正の日付が墨筆で書かれてある古くからの芳名録に繰り返し記されていた本多静六、植村恒三郎(私の祖父)等の直筆の署名で、感慨と共に血縁者としての意識の高まりを覚えました。私たち夫婦もその芳名録に記帳したのですが、交通の不便な時代に道内での野営を繰り返しての富良野着と聞いていたので、飛行機とバスを使っているとも簡単に見学に来た私たちは、何だか気恥ずかしく感じました。

演習林では、気に入った木があれば十万円を負担するとその里親になれて、木の幹に名札を付けてくれるという研究助成制度があることを知り、私も梶先生の車で走りながら里子にする木を捜したところ、斜めに伸びたダケカンバの



私の里子一号のダケカンバの巨木
下にいるのが私です

巨木を見つげ一目で気に入って里子一号としました。上を見ると、傾いている方向に出た枝が、あたかもバランスをとろうとするかのように百八十度回転して伸びている点、木にも脳があるかのような印象を受けたからです。ほとんどの人が真っ直ぐ伸びた大きな木を里子にしているようで私の場合は特異な木でしたが、これを選んだとき、「さすが本多先生のDNAを引き継いでおられる」と梶先生に褒められました。

二〇〇九年三月には、定年を迎えられた梶先生の最終講義と退官記念パーティーに出席させて頂きました。パーティーは、林学の研究に勤しむ研究者たちが、秩父や千葉の演習林からも集まり大盛況でした。門外漢の私は、初めにきちんと紹介されなかったこともあって、出席者にとっては「あの年寄り誰だろう」という感じだったようですが、最後にマイクを借りて、「本多静六のひ孫です」と自己紹介をしたところ、にわか出席者全員の注目の的となり、秩父演習林や千葉演習林の林長先生などが駆けつけてきて、「うちの演習林にも是非お出かけ下さ

い、ご案内します」と次々に名刺を渡され、また若い研究者からは、「本多先生のことをもっと知りたいたいので是非お話ししたい」と声がかかるなど、今日の林学の分野における本多静六の確たる存在感に再度感動を覚えました。

こうした経験から、本多静六が日本に蒔いた林学という学問の種が脈々と受け継がれ、立派に実を結んでいることが実感され、私自身がそのDNAを引き継いでいることを強く認識したわけですが、それと同時に、本多静六のDNAを引き継いだ他のひ孫たちはどうしているのだろうかというふうに思いを馳せ、元気なうちに一度ひ孫たちが一同に会して、静六のDNAがどのような姿に結実しているかを確認し合うのも意義があるのではと考えた次第です。

早速本多静六の直系の孫に当たる本多健一先生(生前いつもこうお呼びしていたので)に相談したところ、賛同を得ることが出来、ひ孫の会の準備にはいることになりました。

まず、本多静六が眠る青山霊園の本多家の墓所に参り、ひ孫の会の準備にはいることを報告したの

ですが、この準備は、私にとっては大変なプレッシャーでした。長い間私の心の中では遠いぼんやりとした存在にすぎなかった本多静六が、突然くつきりと姿を現して生き生きと動き始め、実在した人物としてのエネルギーを放射し始め、その偉大さに感嘆してのスタートだったので、本多静六の名にふさわしい会を、その名に恥じないような会をとるという責任を重く感じながら、家内と二人で、会の準備を進めました。

ひ孫の会の準備

ひ孫の会を開くといっても子供頃の頃から付き合いがあるのは従兄弟同士ぐらいでひ孫の全容も分からない状態だったため、まずその点を確認しなければなりませんでしたが、健一先生夫妻の協力で、静六・銚子から始まりひ孫までの本多家の家系の一覧表を作ることが出来ました。それによると、静六は三男四女の子沢山でしたが、次女的美弥子は三歳で、次男の武は五歳、三男の勝は十九歳で他界しており、ひ孫に繋がるのは、林学者で九州大学の農学部長も務めた植村恒三郎に嫁ぎ四男一女を生

んだ長女の輝子(私の祖母)、同じく林学者で北海道演習林の林長も務めた三浦伊八郎に嫁ぎ二男二女を生んだ三女のイサ子、政治家で防衛大臣なども務めた大村清一に嫁ぎ三男二女を生んだ四女の康子、それに長男の博の四人で、博の子供は健一先生だけなので、孫の世代は総勢十五名(男十、女五)となるのが分かりました。

次にひ孫の世代を家系別に見ると、植村家が十七名(男十二、女五)、三浦家が九名(三と六)、大村家が十一名(四と七)、本多家が四名(一と三)で総計四十一名(二十と二十一)となり、そのうち四名が既に他界しているので、私を除く残り三十六名の住所を調べなければならず、これはそれぞれの家系で既に住所が分かっているひ孫に連絡して、各家系の住所の一覧表を送ってもらいました。

で、ひ孫たちの都合を問い合わせることなく、その日に決めてしましました。

次の作業はいよいよひ孫たちにひ孫の会を開きましようと呼びかけることでしたが、呼びかけの文章は、この拙文の前半「ひ孫の会を開くまでのいきさつ」で述べたこととほとんど同じ内容でした。

会場と日時が決まっているので、呼びかけと同時に出欠の返事も同封したのですが、一度も逢ったことがないひ孫たちも多いと思ひ、ひ孫とその配偶者それぞれに、出欠にかかわらず自己紹介の文章を書いて出欠の返事と一緒に送るように依頼しました。なお、既に他界しているひ孫については、それぞれの配偶者か兄弟姉妹に書いてくれるように頼みました。

幸ひひ孫二十五名、配偶者十九名から出席の返事が届き、自己紹介文も大多数が送ってくれました。なかには、素晴らしい会なので、子供たち(静六の玄孫)も出席させたいとの声もあったのですが、そうなる人数も多く収拾がつかなくなるので、ひ孫の世代に限ることにしました。

自己紹介文は、「略歴、近況、

趣味、人生で特筆すべきことなどを、気楽に書いて下さい」と依頼したのですが、皆頑張って書いてくれました。読んでみると、林学に関係のある道に進んだひ孫は一人もいないことが分かりました。

本多静六の留学先のドイツのタールントの町を訪ねたときの感激を書いた文章もありましたが、私は、言い出しつぺの都合上他のひ孫より短いと不味いのではと思ひ、東大受験のときに後ろの席に六十年安保の国会デモで死亡した樺美智子さんが清楚な姿で座っており、中学・高校と男子校だった私はこんな女性が入るのなら頑張らなければと必死で試験に挑んだこと、ハーバード大学の客員研究員のときに、ボストンのフェンエイパークのライト席で観戦していたら、ホームランボールが目前に飛んできたので思わず立ち上がって手を叩いた姿が、夜のスポーツニュースで鮮明に映し出されたこと、オックフォード大学の客員研究員のときには、現在世界的に最も有名な女性政治家の一人ともいえるアウン・サン・スーチーさんと同じ屋根の下(同じ部屋ではありません)で暮らしてい

たことなどを書いたところ、結局一番長くなつてしまいました。スー・チーさんとは、借家人と家主夫人という関係でした。当時のスー・チーさんはまだ三十代で二人の男の子の母親として普通の主婦の生活を送っていたのですが、「ドクター河内はオックスフォード随一の美人の家に住んでいる」と誰からも言われ、私も今でもそう思っています。

自己紹介文が集まったので、それを会の当日までにひ孫たちに読んでもらうために急いでコピーして、出欠を問わずひ孫全員に送るのが次の仕事でしたが、分かり易いように家系一覧の順に整理し、植村家は白、三浦家は紅葉色、大村家はレモン色、本多家は青、の紙にそれぞれコピーしました。

自己紹介文に加えて、先に書いた静六・銚子を起点とするひ孫までの家系一覧にひ孫それぞれの配偶者の名前も記入して、出席者には出席と書き加えて出席者一覧を作りましたが、その時も、家系別に色分けしておきました。

これらに私の挨拶状を加えると、A4用紙が三十頁を越える枚数になったのですが、これを製本



車に驚いてヤチダモの木に登ったヒグマの幼獣（2～3歳）

する時間も手段もなかったもので、A3の紙で表紙を作り、半分に折ってその中に綴じずに入れまじした。薄い緑色の紙を使い表紙の上部には「本多静六ひ孫の会」と大書してその下に日時と会場を二行に分けて小さく記入し、下半分には、エゾマツとトドマツの森の太い幹の部分の撮った北海道演習林の絵葉書の写真を、また裏表紙には、北海道演習林で車に驚いてヤチダモの木に駆け登ってしがみついているヒグマの幼獣の写真を東京大学大学院農業科学研究科附属科学の森教育センター概要201

0から借用しました。北海道演習林の創成に携わった林学博士本多静六のひ孫の会にふさわしいレイアウトになったと自負しています。

こうした作業に加えて、実際の会をどうするかを決めなければなりませんでしたが、ひ孫たちが自由に懇談出来るように立食式のパーティーとし、部屋の中央に料理と食器を置いたテーブルを用意して、周囲に椅子を配置するスタイルを採りました。

料理と飲み物は、松本楼の担当者と相談し、何回かのファックスのやり取りを経て決めました。

また、健一先生が本多静六の大きな写真と幾つかの資料を持参するとのことでしたので、それを乗せるテーブルを銀杏の木が見える窓に面した位置に配置しました。

準備の最後の作業は、会場お互いが直ぐに認識し合えるように首から掛ける名札を用意することでしたが、幸い渋谷の東急ハンズで、十センチの紙が入る吊り下げタッグ名札ケースが見つかったので、出席者の名前を、先に述べた家系別の色紙に横書きで大きく打ち出し、ひ孫の場合は氏名の

左上に直径二センチの赤い○を付けてひ孫であることが直ぐに分かるようにしました。配偶者は、名前の下に例えば私の妻の場合は十郎妻と書いて、どのひ孫の配偶者かが一目で分かるように工夫しました。

ひ孫の会の当日

定刻に銀杏の間に集まった健一先生夫妻を含む出席者四十六名は、中央の料理のテーブルを家系一覧の順に丸く囲み、健一先生の挨拶の後で、一人一人が名乗りひ孫同士が認識し合うことから始め、一巡後、健一先生の音頭でジュースによる乾杯となりました。その後食事と歓談に入ったのですが、「母（孫の配偶者）がこの会のことをとても喜んで写真を沢山撮ってくると、食べることよりもカメラを持って走り回ることに集中していたひ孫もいました。一方では、高速写真の研究者を父に持ち、



本多静六ひ孫の会の記念撮影

カメラメーカーに勤務していたため、当日の写真撮影係を依頼したひ孫が、実は「写真は量より質である」という尤もな意見の持ち主でほとんどシャッターを押さずという話となりました。

二時間ほどの歓談の後、ひ孫たちからのささやかな感謝の印とし

て健一先生夫妻にランの鉢植えを贈るセレモニーがあり、その後全員が銀杏の木の下に集まって記念写真を撮って散会となりました。

数日後に業者から記念写真が私の所に送られてきて、それをひ孫全員に配るのが最後の作業でしたが、当日せっかく覚えた名前と顔との関係がいつまでも残るように、写真を一旦A3の大きさに拡大コピーして、一人一人の横に名前を縦に打ち出した紙を貼り付け、それをA4に縮小コピーしたものを人数分作り、写真と一緒に送りました。

以上が本多静六ひ孫の会と私の関わりで、呼びかけ人としての責任の重さを感じながらの作業でしたが、結果としては、ひ孫たちが皆大変喜んでくれたので夫婦ともども安堵しました。特に嬉しかったのは、健一先生がこのほかこの会のことを喜んで、準備の段階からいろいろと力を貸してくれたことでした。

ひ孫の会のその後

本多静六ひ孫の会は、一期一会の催しだったわけで、その後は何

かを行うようなことはなかったのですが、二〇一一年八月に埼玉県の主宰で「学問と情熱 本多静六」というビデオを上映する企画があり、上映後に本多静六についての講演を私に依頼してきました。私には話すことがなかったので困ったのですが、健一先生の三女博美の配偶者正木隆が本多静六と同じ研究室の出身と梶先生から伺っていたので、電話で依頼したところ、快く引き受けてくれて、「本多静六の功績と業績―森林生態学の視点から―」という題の講演が行われました。

ひ孫たちにこの会のことを知らせたところ、玄孫も含めて大勢が集まりました。主催者側に予め依頼して部屋を取っておいてもらい、上映と講演が終わった後でその部屋に集まって、ペットボトルの飲み物や袋菓子等を皆で用意して、近況やその日の会の感想などを一人ずつ話してもらいました。そのなかでは、玄孫の一人から「本多静六は蓄財の人物とばかり思っていたのに、今日は立派な林学者であることが分かって良かった」といった趣旨の発言があったのが印象的でした。私も、ともすれば

苦学したことや蓄財のことが強調されがちの中で、林学の視点から画像を交えながら本多静六の業績を分かり易く語ってくれた講演内容に、これまでにない新鮮さを感じました。

講演の中で、台湾に本多静六縁の巨木があつて現在では台湾の観光名所となっていることが紹介され、いざ行ってみようと思つていたところ、最近台湾旅行をしたひ孫の一人から、「本多静六のことをよく知っていて、日本語も出来る案内人と知り合いになったから、行くときは紹介する」と連絡がありました。その案内人が元気な内に台湾訪問を実現したいと思つています。

久喜市では、本多静六に関するさまざまな活動を活発に進められています。が、「顕彰する会」に入会していないひ孫たちにはそれが伝わっていない面もあるようで、今回のことなどを通じて今後久喜市の活動とひ孫たちとの関係が深まっていくことが期待できるのではと思つています。



第八回本多静六賞 受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課
主査 高野 由可理

一 第八回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。

第八回本多静六賞については、計十四件の推薦による応募があり、選考委員会による選考を経て、長瀨町在住の岩田洋（いわたひろし）氏が受賞されましたので御紹介します。

二 岩田洋氏の経歴と功績



岩田 洋 氏

○経歴

岩田洋氏は、県立秩父農工高等学校教諭(林業科担当)、県立農業教育センター指導主事、県立小鹿野高等学校校長を歴任。定年退職後は、埼玉森林インストラクター会会長、全国森林インストラクター会会長、日本森林インストラクター協会顧問を歴任し、現在は、埼玉森林インストラクター会の顧問を務めています。

○功績

岩田氏は、十六年間もの長きにわたり埼玉森林インストラクター会の会長を務め、森林教室や学習体験活動の指導、研修を通じて、多くの県民に森の働きや森林・林業の大切さを普及啓発するとともに、多数の後輩インストラクター



宝登山での植樹

の育成に尽力されてきました。



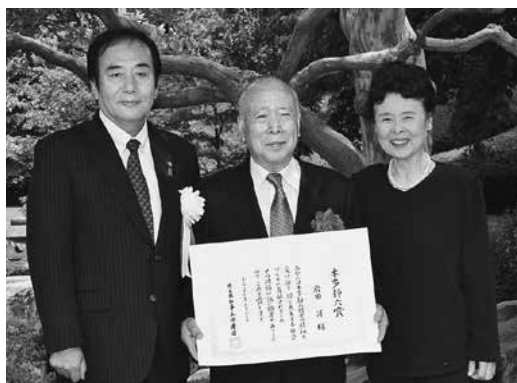
指導の様子

るなど、県内各地で森林の再生や地域振興に貢献しています。

三 本多静六賞表彰式

表彰式は、平成二十七年五月二十五日に知事公館で行い、上田清司埼玉県知事から岩田洋氏に表彰状と副賞が贈られました。

また、岩田氏からスライドを使って活動の紹介が行われました。



表彰式の様子

四 終わりに

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいます。

引き続き、皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

教員時代は、県立秩父農工高等学校で教鞭をとるほか、旧文部省発行の高校林業科用の教科書を編集するなど、多数の林業後継者の教育に尽力されました。退職後は、ときがわ町桐平(くぬぎだいら)地区で、地元小学校の児童と毎年植樹を行い、「ふるさとの森づくり」を子供たちに受け継ぐ活動を行うほか、岩田氏の地元である長瀨町宝登山(ほどさん)で、長瀨町と埼玉森林インストラクター会が「森づくり協定」を締結し、ヤマツツジの植樹活動を行っています。

また、新座市の雑木林管理活用推進市民会議の委員や、「彩の国ふれあいの森友の会」の会長を務め

長野県須坂市「臥竜公園」を見学して

本多静六博士を顕彰する会

高橋 兼一

早朝のやや小寒い中、風も無く好天が予想された十月二十九日午前六時、菖蒲文化会館「アミーゴ」に集合した本多静六博士を顕彰する会の柴崎会長以下十一名の役員メンバーは、恒例の研修会の目的地である長野県須坂市にある本多博士設計の「臥竜公園」を目指し出発しました。

乗車直後に柴崎会長から挨拶と同時に今回の研修内容について「臥竜公園」、「中島撫山記念碑」、旧家の「田中本家博物館」を見学する旨説明がありました。また、バスの中では、車内研修を行いました。本多博士の研究で有名な岡本貴久子博士執筆の「本多博士の西洋思想の受容と展開」を資料として、参加役員が順番に読みながら、生きたる記念碑として地域に伝わる老樹・名木を尊重し、植物の「生命」について論じ、記念に木を植えることを推奨した博士の思想について学びました。

研修コースは関越高速道路の東松山インターチェンジからバスは乗り、途中、二ヶ所のサービスエリアで休憩を取り、順調に十時過ぎには臥竜山の麓にある須坂市立臥竜公園に到着しました。

到着直後に公園管理事務所の職員に迎えられ、管理事務所本館三階の見晴らしの良い研修会場に案内されて、公園管理事務所の山岸所長、瀧沢課長及び丸山係長の三人から公園の歴史、施設や運営状況について説明を受けました。



熱心に担当者の説明を聞く会員

その後、園内の遊歩道に沿って公園内を詳細に案内して頂きました。臥竜公園は当時、世界恐慌に見舞われていた昭和初期に、製糸の町須坂の製糸工場で働いていた

多くの人達の失業対策として昭和六年に築造され、八十四年の歴史があり、総面積約三十ヘクタール、園内には市営の博物館、動物園、水族館、ボート池（竜ヶ池）、古墳、子供達の遊具広場や運動施設（野球場、テニスコート及び運動広場）等を併設した総合的な公園で、特に人気のあるのは動物園で、カピバラやペンギントラが人気で有料入場者だけで、過去には二十三万七千人（二〇〇六年）余りの入場数があったという。他に賑わいを見せているものとしては、幼稚園児達が楽しむ遊具広場もありました。そして、春には竜ヶ池の周りに植栽されている百六十本程の桜祭り、秋には大輪の菊祭りなどが行われ、公園を訪れる人達を楽しませているとのことでした。公園を見学して、本多博士は「公園造りの基本的な考えとして天然の地勢、地形、気候、風土や付近の史跡、名勝、天然記念物、歴史、伝説、そして地方民の要求、人情、風俗、習慣や経済の状況等を勘案して造る」という考えの一端がこの臥竜公園の見学から強く窺えました。

次いで、第二の研修場所である

「中島撫山記念碑」に向かいました。場所は極めて臥竜公園の近くの奥田神社の境内にあり、ここでは久喜市でも有名な中島撫山に造詣の深い、当顕彰する会の役員である小林晴夫理事が説明を行いました。碑は須坂市出身の書家中島淡水の顕彰と慰霊のために建立されたもので、中島撫山は詩文集の「淡水翁碑」で関わりがあるが、撰文者の撫山とは中島姓であるが縁戚関係には無いということです。

その後、市内のお店で昼食をとった後、次に第三の研修場所である豪商の田中本家博物館を見学しました。江戸中期の享保十八年に現在の須坂市穀町で穀類、菜種油、煙草、綿及び酒造業などの商売を始め、代々須坂藩の御用達を務め、大地主へと成長したそうので、その財力は、須坂藩をも上回る豪商となったそうです。土蔵には、江戸中期から昭和までの田中家が使用・所蔵した衣装、漆器、陶磁器、玩具及び文書等が大変良好な状態で残され、質と量の豊富さから近世の正倉院とも呼ばれているそうです。

研修終了後、市内のリンゴ栽培農家に寄り、収穫したリンゴの試

を与えてくれています。

「私たち人間が新たに苗木を植えたり、種をまいたりせず、立ち枯れた倒木も下草もここでは一切手を加えず放置しています。やがて、その全てが大地の肥となり、次世代の樹木を育てる糧となるのです。」との説明に納得しました。

七十ヘクタールの広大な敷地中央には、明治天皇と昭憲皇太后をお祀りする本殿があり、その周囲に位置する長殿、客殿、神楽殿と共に荘厳さに満ち満ちています。

一方、南池、北池には鯉や亀に混じって、カモなどの水鳥が遊び訪れる人の目を楽しませてくれます。また、深い森の中では、オオタカが営巣する姿が、毎年見られるようで、自然が育む力強さを痛感しました。

年間の参拝者数は一千万人近いようですが、その誰もが緑溢れる森で深呼吸し、生きる力を持ち帰ってくれることと思います。

溪頭自然教育園区(旧東京大学台湾演習林)を訪れて

久喜市 渋谷 克美

台湾大学に引き継がれた演習林

日清戦争の下関条約により台湾が日本領となった翌年の明治二十九年(一八九六)九月、本多博士(以下「博士」省略)は山林調査のため国の命により台湾に渡りました。治安が不安定な中、台湾総督府からは安全地帯だけの調査を勧告されましたが、本多一行は台湾の最高峰玉山(旧称新高山)の探検を願い出て、許可を得て森林調査を実施しました。

その際、玉山一帯の森林に熱帯から寒帯にわたる種々の天然林が存在することを知った本多は、学術研究に絶好の場所であると判断し、大学の演習林とすることを提案したと言います。

その後台湾総督府との調整を経て、明治三十五年(一九〇二)台湾の地に東京帝国大学付属演習林が設立されました。設立の陰には、本多とドイツ留学時代から親交のあった後藤新平(当時台湾総督府民政長官)の協力があったと言わ

れています。

台湾演習林は、現在国立台湾大学農学院の実験林となっており、総面積は三万二千七百八十六ヘクタール(台湾の総面積の約一%)で、この内の一部約八百ヘクタールが昭和四十八年(一九七三)から「溪頭自然教育園区」として一般に公開されています。

海拔は千メートルを超え、年平均気温は摂氏十六・六度と、避暑地として親しまれている一方、五十歳代以上の地元の方には新婚旅行地として有名とのことでした。

実験林への拠点基地・台中市

平成二十七年七月、私は休暇を利用して単身ここを訪れました。ここ一、二年の間に東京大学の秩父演習林と千葉演習林を続けて見学したことから、是非とも台湾の演習林も見たいと思っていました。

台湾(台北)

までは成田空港から飛行機で三時間弱です。溪頭自然教育園区へは台中市が拠点



溪頭自然教育園区への拠点となる台中駅

基地となります。正午過ぎに桃園国際空港に到着し、入国後直ちにバスで台中へと向かいました。高速道路を二時間十分程走り台中駅に到着。駅舎は日本の統治時代に造られた時代を感じさせる何とも瀟洒な建物です。その一方で駅舎の背後には超近代的な橋上駅舎が建築中で、街が大きく変貌を遂げる姿がありました。台湾第三の都市といわれるとおり、駅付近の賑わいは日本の地方都市の県庁所在地並です。その日は予約しておいた駅近くのホテルに早めにチェックインし資料を再確認します。

台湾全土を網羅するバス交通網

翌朝、駅から徒歩十五分程のバス乗り場(南投バス)へと向かいます。台湾ではバス交通が網の目のように発達していますが、バス会社の数も半端ではなく、そのため目的地へ向かうバス乗り場を探すのが大変です。幸い駅に併設した観光案内所に日本語を話せるスタッフがいましたので助かりましたが、下調べは必要です。行き先を書いたメモを示すと丁寧に道順を教えてくださいました。

切符売り場で、目的地までの往

復のバス代と入園料がセットになったチケットを購入します。代金は四百二十元（約千六百元）と遠距離の割には安い。乗客数人を乗せた大型の路線バスは午前八時に発車し、途中客を乗せては降りし終点へと向かいます。新しくできた台湾新幹線の高速台中駅では大勢の客がどっと乗り込み、車内は一気に賑やかとなり、路線バスから観光バスに早変わりしました。天気も良好です。

高尾山のような賑わい

午前九時三十五分、終点の溪頭自然教育園区に到着。乗客のほとんどがここで下車します。バスを降りたとたん檜のような清涼な香りに包まれます。森林浴とはよくいったものです。入口付近は老若男女であふれ、賑わいは東京の高尾山のようなようです。駐車場もほぼ満車で、人気のほどが知れます。

本多静六

がこの風景を見れば驚いたことだらうし、改



溪頭自然教育園区の入場口

めてその先見の明に敬服しました。つまり実験林が、本多静六が理想とする公園の姿になっているのです。

自然教育園というだけあって、園内はよく整備されています。東屋やベンチは勿論、案内板や樹木表示が各所に設置してあります。漢字で書かれているので中国語が分からなくとも不自由は感じません。幅の広い園路（林道）は全て舗装されており、高齢者や足の不自由な人向けの乗合の電気自動車も運行されています。遊歩道もよく整備されて歩き易く、まさに下界の喧騒を忘れさせてくれる楽園です。

午前十一時を過ぎると、あちらこちらで弁当を広げる姿が見られます。台湾では日本語の「弁当」がそのまま使われています。園内



神木前の広場で昼食を楽しむ行楽客

にはレストランや売店もあります。が、圧倒的に弁当持参派が多く、ピクニックを楽しんでいます。

自然の中で一日くつろげる場所

溪頭自然教育園区は、見せ場も多く、竹でできた橋が目印の大学池、スギの大木の上空を縫って歩



竹でできた吊り橋がシンボルの「大学池」

く空中走廊、樹齢千年の神木紅檜、日本統治時代に植えられた銀杏林、竹類見本園、針葉樹標本園、森林生態展示センター、レストラン、土産物店等々、特徴的な植物群や施設がそれぞれの場所で迎えてくれます。主な場所だけ巡るにも最低半日は必要です。始めは涼しさを感じていましたが、高低差もあり歩くと軽く汗をかき程で、帽子や飲み物は必需品です。

よく見ると園内にはごみ一つも落ちていません。モラルが高いのでしよう



園内のごみ箱

か。要所要所にはしゃれたごみ箱が設置されています。木の切り株を模したもので右が資源ごみ、左が一般ごみと分かれています。気がつくとりすが近くに寄って来て餌をせがむし、沢ではカジカガエルとおぼしき蛙の声も聞こえてきます。清涼な空気の中で、一日ゆつくり過ごせる場所です。

惜しみつつ、午後一時半発の路線バスに乗り、三時に台中駅に戻ります。途中降り降りしたのは、やはり地元台湾の人ばかりで、結局日本人はおろか欧米人も誰一人見かけませんでした。

この穴場スポットともいえる溪頭自然教育園区については、台湾大学の日本語ホームページの他、台北ナビ（TAIPEI navi）でも詳しく見ることが出来ます。

台湾の新たな魅力を感じた旅でした。

企画展

「本多静六を支えた妻銚子と養父晋」について

文化財保護課 栗原 史郎

久喜市教育委員会では、平成二十七年十一月十六日から平成二十八年三月二十七日にかけて、本多静六記念館の一角を会場にして「本多静六を支えた妻銚子と養父晋」と題する企画展を開催しました。この展示は、平成二十七年五月に本多家から久喜市に新たな資料をご寄贈いただいたことをきっかけとするもので、今回は二十三点の資料を紹介しました。本稿では改めて二人の人物像と展示資料について紹介します。



企画展の全景

本多 銚子（一八六四〜一九二二）

■幼少の頃より才媛の誉れ高く、英語に堪能

本多静六の妻である銚子（「せん」とも言う。）は、元治元年（一八六四）一月十一日に父敏三郎（後の晋）と母梅子（「むめ」とも言う。）の長女として生まれました。銚子は父晋の自慢の娘で、明治五年に日本で初めて開設した官立の東京女学校（通称「竹橋女学校」とも言う。）に入学し、書も当時有名な書家佐瀬得所（一八二二〜一八七八）の教えを受けるなど才媛でした。明治六年十一月二十九日に明治天皇の皇后（後の昭憲皇太后）が東京女学校に行啓され、学習の様子をご覧になられた際は、銚子を含む成績優秀な十五名の生徒が賞与を賜りました。展示では、このとき頂いた英語の辞書を紹介します。

銚子は伯母の出口せい（晋の姉。「たか」とも言う。日本キリスト教伝道者の一人）に可愛がられ、その影響でキリスト教を信仰するようになります。銚子は母梅子とともに明治九年頃キリスト教徒になり、その信仰は生涯変わること

がありませんでした（大正十年の青山教会会費領収証を展示）。明治五年、大蔵少輔吉田清成の米国派遣に伴い父の晋が随行を命じられた際には、銚子は伯母が身を寄せる米国長老協会宣教師カロザース夫人の開設した築地居留地のA6番女学校に預けられ、英語を学んでいます。また、明治十年から十一年頃には伯母を介してアメリカ人宣教師メアリー・ツルー夫人のもとで英語を学び、十四才の頃には外交官河瀬真孝子爵夫人のために通訳をつとめたといわれています。河瀬夫人は伊豆葎山代官江川太郎左衛門の娘で、銚子の母方の祖父兩宮中平が江川太郎左衛門の江戸詰家老であったことから本多家とも親交があったようです。

■日本で四人目の公認女医

銚子は、明治十四年十七才のときに、後の海軍軍医総監高木兼寛の発意で開設した成医会講習所（東京慈恵会医科大学の前身）に入学しました。高木が日本の女子に近代医学を修得する能力があるかどうかを試すため、東京女学校出身の銚子と松浦里子を抜擢したからです。当時女性が医者になる

ことは困難でしたが、銚子は熱心に勉強し、明治二十一年二十四才のときに試験に合格し、日本で四番目の公認女医となりました。なお、医籍登録年月では、女医第一号の荻野吟子が明治十八年十二月、第二号の生沢クノが明治二十年三月、第三号の高橋瑞子が明治二十年十二月、第四号の本多銚子が明治二十二年七月となります。



竹内茂代(旧姓 井出茂代)結婚式の記念写真 大正5年(1916)前列右から2番目が銚子 左から2番目が静六

明治二十二年東京帝国大学農科大学の学生であった折原静六を婿養子に迎えて結婚。翌二十三年静六がドイツに私費留学すると、東京芝区新堀町（現在の港区芝二・三丁目）の自宅に診療所を開業しました。銚子の評判はすこぶる良く、患者は門前列をなしたといえます。銚子は、往診の際は遠近に

かかわらず交通費を受け取らず、貧困者には広く治療を施しました。また、薬の代金を上・中・下の三等に分け、患者の財産状況に応じて納めさせたといえます。さらに自宅での診療の傍ら慈恵病院の産婦人科に勤め、同看護婦養成所の講師となり、また横浜フェリス女学校の衛生学を担任する等多忙を極めました。明治天皇第六皇女常宮昌子内親王殿下の侍医も務めています。展示では、この頃銚子が使用した往診用の靴や医療用器具、薬の調合をする際、材料の重さを量るために使用した医療用計量器、自筆の「看護婦解剖講義録」を紹介しました。



銚子が使用した往診用の靴や医療器具等

明治二十六年静六の帰国後は、夫に従い東京駒場の農科大学内の

官舎に移りましたが、医業を捨てることができず、赤坂新坂町（現在の港区赤坂八丁目）に新たに診療所を設け、毎日人力車で往復しました。しかし、子供も生まれ、また夫静六を支えるため、明治三十年頃診療所を閉じました。銚子は静六との間に三男四女をもうけています（うち二男一女は早世）。

■夫静六を支え、家庭内を平和に保つジャン憲法を考案

熱心なキリスト教徒であった銚子は、同情心にあつく、困っている人には着物などを惜しげもなく与えました。本多家に集まる人たちは皆、銚子を信頼し、その言葉ならどんなことでも聞く風であったといえます。銚子は、夫静六に後顧の憂いなく研究活動に専念して欲しいと願い、子育てはもちろんのこと、家庭内の一切の庶事を引き受けました。しかも、毎夜子供を寝かしつけた後は、静六の助手として原稿の浄書や講義案の整理をし、さらには英文翻訳や手紙の代筆まで行いました。

また、家庭内を平和に保つため、ジャン憲法を考案しました。これは夫婦間もしくは家族たちのあい

だで、何か意見の一致をみないところがあると、お互いに二度までは意見を主張し合うが、それでも決まらない場合、三度目はいつでもジャンケンで決めるというものです。おかげで家庭内はいつも笑顔が絶えなかつたといえます。



本多家記念写真 明治34年(1901)頃 (後列左端が銚子、後列右端が静六)

■早すぎる死

銚子は静六をよく支え、妻たるものは夫のためにつとめ尽くして倒れるもまた本懐だとの確信をもっていたようです。静六が林学博士として大成し、しかも四分の一天引き貯金を実行して財産を築くことが出来たのも、銚子なくしては不可能であったことでしよう。銚子は不幸にも四十三才頃か

ら慢性腎臓病を患い全快不能となりましたが、その後十四年間生を全うし、大正十年十二月二十五日に脳溢血を発して五十七才で亡くなりました。銚子を失った静六の悲しみは深く、彼女の存在なしには、今日の私はありえなかつたかも知れないと後に語っています。

銚子の没後、静六は無き妻の遺志に従い東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）へ奨学金として額面千円の帝國公債を寄附しています。そして利子の半額以下を運用して本多銚子奨学金を創設し、後進女医の育成に充てるよう求めています。東京女子医学専門学校は、近代女子医学教育の基礎を築き、日本女性の地位向上に努めた吉岡弥生（一八七一―一九五九）が明治三十三年に自ら後進を育成するため開いた医学学校です。医師としての道は半ばで断念した銚子でしたが、常に後進の育成を気にかけていたことが窺えます。なかでも銚子の後輩女医で本多家のかかりつけ医でもあった竹内茂代（旧姓井出）とは特に親しく、大正五年の茂代の結婚式には静六と銚子が揃って出席しました。このときの集合写真から銚子

の遺影が作られています。

静六は大正十一年に銚子を偲んで、「大西洋上亡き妻の百ヶ日にあひて―旧き女を偲びて新しき女に告ぐ―」という回想を、匿名で雑誌に寄せています（「婦人の友」第十六巻第八号、大正十一年八月号所収）。静六はこれの中で、銚子の生き方は「旧き女」の典型であつたが、「新しき女」（白蓮女史を代表とする）と比べてむしろ幸福だつたのではないかと記しています。

昭和十一年に日本女医会の依頼で長男の博が綴つた「女医本多銚子の思出」という回想では、「母は真に日本婦人の典型で、どのような人からも穏やかで素直な賢い婦人と賞賛される愛情深い母親であつた。」と振り返っています。

本多 晋（一八四五〜一九二二）

■一橋家譜代の臣本多家を継ぐ

本多静六の養父である晋（改名前は敏三郎）は、弘化二年（一八四五）二月二十一日多賀家に生まれ、その後一橋家家臣の本多家を継ぎました。元治元年（一八六四）七月の禁門の変（長州藩の尊王攘夷派が朝廷を冒そうとした事件）では、一橋慶喜に従つて朝廷警護の任にあたり、その功績により朝廷から褒賞を賜っています。慶応二年（一八六六）慶喜が十五代將軍になると、そのまま幕府に仕え、陸軍付調役並（陸軍奉行配下の役職）となりました。

■彰義隊を組織

慶応四年（一八六八）正月、鳥羽・伏見の戦いで徳川幕府が朝敵となると、同年二月慶喜の名譽回復のために彰義隊を組織しました。晋は彰義隊の幹部（当初は幹事のち頭取となる）として対外折衝を担当しますが、二月二十七日、落馬事故で足を骨折してしまい、隊から離れることを余儀無くされます。

彰義隊は、江戸城開城後も上野の寛永寺に立て籠もつて徹底抗戦する構えでしたが、同年五月十五日の上野戦争で大村益次郎が指揮する官軍に鎮圧されてしまいました。この時晋は、前日に知つた官軍総攻撃の情報を何とか上野山の同志に知らせようと努力しますが、官軍に阻まれて果たせず、参戦すら出来ませんでした。晋は同

志を殺してしまつた苦悩と後ろめたさを生涯胸に秘めて生き続けました。

展示では、晋が、上野戦争や五稜郭の戦いなどで亡くなつた彰義隊隊士の名前を記した「彰義隊戦死者名書上」（後半部分が焼失しているが、約一六〇名の隊士の名前を確認できる）や、慶応三年の大政奉還から翌年の彰義隊の結成、上野戦争後に至るまでを記した晋の自叙伝「喘余吟録」（山崎有信著『彰義隊戦史』隆文館、明治三十七年刊に採録）、また、かつての部下源助と田心寺の若僧仏眼が彰義隊を脱走し、同士十一人と扇谷町（現入間市扇谷町）で軍資金を徴用しようとして村人に被害された事件を記録するため、大正十年に晋が現地に建てた石碑の拓本「彰義隊遭難者碑拓本」を紹介しました（石碑は入間市指定文化財）。

■明治以降のあゆみ

上野での敗戦後、本多は名を晋と改め、しばらく静岡で隠遁生活を送りました。その後、渋沢栄一の推薦をうけて、明治三年七月に民部省に出仕、次いで大蔵省に入

ります。同五年二月、大蔵少輔吉田清成に随行してアメリカ合衆国からヨーロッパに渡航し、翌六年帰国しました（米国派遣随員辞令を展示）。明治十三年退官して横浜正金銀行の役員となり、同二十一年まで勤め、退職後は彰義隊の往時を思い、上野東照宮に奉仕する生活を送りました。



晩年の本多晋翁

■本多晋と静六

明治二十二年一人娘銚子のために、東京帝国大学農科大学の主席であつた折原静六を婿養子に迎えようと縁談を進めました。静六が出した「卒業後、ドイツに四年間留学させる」という条件も、財産のゆるす限り何年でも洋行を引き受けましょうと快諾し、また銚子の優秀さに静六が気づいたこともあって、無事結婚に至りました。しかし、静六のドイツ留学中の洋行費として用意した金四千元を、預けておいた銀行家の破産で失っ

てしまい、送金できなくなるとい
う憂き目も見ました。

■**慷慨の士・本多晋**

晋は、号を可斎と称し、禅を修
め歌道を研究し、世事に遠ざかろ
うとしました。しかし、国を憂い
思う気持ちは時に抑えることがで
きず、明治三十八年日露戦争の講
和条約に対して、これを屈辱的
として反対の声を上げました。大正
十年九月に胃癌がわかり、同年十
二月二十六日に亡くなりました。
享年七十六才でした。

展示では、明治から大正にかけ
て晋が詠んだ和歌の遺稿である
「隋縁詞藻 短歌」（新年、四季、
旅、祝賀、述懐、哀傷、戦時、雑
の十一部門にまとめた歌集）、「隋
縁詞藻 長歌」（新年、四季、旅、
離別、祝賀、哀傷、戦時、雑の十
一部門にまとめた歌集）、「隋縁詞
藻 大正十年」（大正十年に詠んだ
歌を綴ったもの）、及びこれらを
大正十一年に孫の博がまとめ、静
六の名で自費出版した『隋縁詞藻』
を紹介しました。大正十年は、本
多家にとって悲しむべき年で、十
二月二十五日に銚子が、翌日に晋
が相次いで亡くなっています。こ

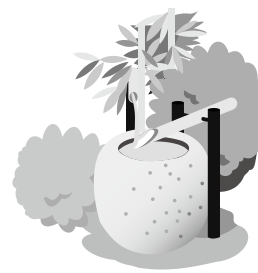
の本は、その手向けとして出版さ
れたものでした。なお、「隋縁詞藻」
という書名は、晋が自邸（渋谷区）
を隋縁亭と名づけたことに由来し
ます。晋は和歌を、医師で万葉集
に通じた笹村良昌（一八三二〜一
九〇九）に師事しました。晋は、
花鳥風月を友にし、同好の人々と
ともに「心の声」を発刊して歌道
の普及を図っています。



和歌を詠む本多晋

また、日露戦争の講和条約に際
し、列強に譲歩して賠償を放棄す
る政府の方針を、国家的な屈辱で
あるとして晋らが反対意見を表明
した「姑息ナル講和ヲ排斥スルノ
請願書」と、日露戦争の講和条約
（ポーツマス条約）が九月五日に
調印されたことに憤慨し、晋が毎
日新聞に出した「本多晋社会上死

去の広告」を紹介しました。この
広告で憂国病の本多晋は、社会上
死去したと告げています。



編集後記

昨年十一月東北地方の旅の途
中に五能線に乗りました。

北金ヶ沢（きたかながさわ）
駅の近くにイチヨウの木があ
り、多くの観光客でにぎわって
いました。二〇〇四年に国の天
然記念物に指定された日本一
の大イチヨウであるとのこと
です。幹の太さが二十二メートル
で樹齢が一〇〇〇年以上とい
うから驚きました。高木となつて
おり、とても立派なイチヨウで
ありました。そして、日比谷公
園の首かけイチヨウ（樹齢五〇
〇年）をすぐに思い出し、日本
一のイチヨウにお目にかかれる
とは予想もしていなかったのだ
とともうれしかったです。日本
一の大イチヨウも公園のイチヨ
ウも更に樹齢を伸ばして、人々
を喜ばせてもらいたいと思いま
す。そして、われわれを見守り
続けてもらいたいと思います。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会
《窓口》

久喜市役所企画政策課

〒346-0101 埼玉県久喜市下早見85-13
電話 0480-221111(代)

久喜市富浦総合支所総務管理課

〒346-0192 埼玉県久喜市富浦町新堀38
電話 0480-851111(代)

1(代)

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会
の活動をさらに充実させるため、一
緒に活動していただく会員の方を
広く募集しています。また、当会
の趣旨にご賛同いただける団体
会員の皆さんも募集しています。

入会受付…随時

年会費…個人会員1,000円

団体会員5,000円

問合せ…本多静六博士を顕彰する
会窓口